

9

国語問題紙

2025 年 2 月 9 日

11 : 50 ~ 12 : 50 (60分)

注 意 事 項

1. 国語の問題紙は全22ページである。
2. 解答はすべて選択肢の中から選び、その番号を解答用紙（マークシート）の指定された欄にマークすること。
3. 試験開始の合図があるまで問題紙を開いてはいけない。
4. 試験終了まで退室してはいけない。

次の文章を読み、後の設問に答えよ。

さて、「人間」というのも当然、一つの類概念¹（普遍概念）を表す言葉である。唯名論によれば存在するのは白人のベティや黒人のジャックや日本人女性のヨウコや男性のヒロシ……だけであって、「人間」というものは実在するものではなかった。「人間」という言葉とそれが指し示す概念は、「ジャックは人間だ」「ベティも人間だ」「コロは人間でない」……という個々の認定行為の結果はじめて人々の頭の中に作られていく知的産物なのであって、あらかじめ世界の側に「人間」なるものがデーンと存在するわけではないというのだった。

これに対する実念論からの批判は、そもそも「ジャックは人間だ」「ベティも人間だ」……といった認定行為ができるのは、ジャックやベティという多様な個体に先立って「人間」のイデア——たとえば「理性的動物（animal rationalis）」というふうに定義される人間の本質——が直観されているからこそであり、もしそうした先験的直観がなければ個々の認定行為——それが唯名論者の出発点なのだが——自体が成り立たないだろう……という筋の議論であった。もちろん、これに対しては唯名論者はさらに反論しうる。イデア主義者の「人間は理性的な動物である」という本質直観もやはり、「ベティは理性的だ」「ジャックも理性的だ」「コロは理性的でない」……といった数限りない枚挙の果てに⑦に得られた暫定的結論にほかならないのだ……、と。

ここには議論のウロボロス的な食い合いがあつて、どちらの立場もそれぞれ相手の立場の誤謬を自分の立場から説明しうる仕組みになつていえるように見える。ことがらが循環しているから、タマゴが先かニワトリが先かという問題と同じように、どちらの立場にも同程度の理がありそうな気もするのだ。

だが、本当に議論は循環しているのだろうか。確かに、「人間は理性的な動物である」という人間の本质規定が誰一人として疑いえない真理であるとするなら、いや疑おうが疑うまいがそんな人間の思惑とは無関係に成り立つ絶対的真理であるとするなら、議論は循環することになるだろう。だが、はたして「人間」とはそれほど確固不動のものであつたのだろうか。²違ふと思う。たとえば、「人間は理性的な動物である」という先ほどの本質規定の中には、肌の色は含まれない。

I 当然、Aが人間であるか否かを判定する基準の中に、Aの肌が白いか黒いかという問題は関係してこない。そんなことは人間であるなしにはかわらない「非本質的」なこと、取るに足らない特徴であると見なされているのだろうか（もちろん、ばくもそう考えているが）。

（注）ウロボロス：古代の象徴の一つで、己の尾を噛んで環となつた蛇もしくは竜を図案化したもの。

だが、ある存在を「人間」と認定するにあたって何が「本質的」で何が「非本質的」であるとされてきたかというところを事実として振り返れば、それは常に一つに決まっていたのではなく、³ 紆余曲折する歴史の中でさまざまに変化してきたことが分かるだろう。肌の色を「非本質的」だとする人間観は、たかだかここ二〇〇年くらいの世界史の中で、
 II 人種差別の撤廃を求める黒人たちの血を流したたかいをとおしてようやく確立されたものなのであって、彼らを肌が黒いという理由だけであらかじめ「人間」のファミリーから排除し、牛や馬のように売買した奴隷制度がかつては長い間存在したのである。

人間の本質規定に肌の色を絡ませるなんて、そんな非科学的なことをやっていた昔は別さ。ちゃんと科学的に調べれば「人間」であるなしが肌の色に関係しているなんてモウ想は吹き飛んでしまうよ……と言うだろうか。しかしこの言い方は、「科学的」に見れば人間の本質規定が一つに決まることを前提にしているように思えるのだが、それも違うような気がするのである。なぜなら、何が人間で・何が人間でないかをめぐるカテゴリーの線引き争い（言葉の争奪戦）⁴ は、いまでも形を変えて続いているからであり、それは必ずしも「科学」の発達とは関係のない場面で争われていると思われるからだ。

たとえば妊娠中絶のことを考えてみよう。中絶とは母体の中の胎児を殺すことであるから、もし胎児が一人の人間と認められるならば当然中絶は殺人行為にあたることになるし、その手術を行う医者や受ける母親は殺人罪を負うことになるはずだ。

III 中絶に関しては、右のような前提に立つてきわめて厳カクに禁止するカトリック教会やイスラム教の影響が強い国もあるが、日本のようにきわめて寛容な国もあるわけだ。中絶を容認するこうした国の法律においては、一定の基準を満たしてさえいれば中絶は全く罪にならないのである。ということは、この国においてはたとえば受精してから四カ月以内の胎児は事実上「人間ではない」と暗黙のうちに了解されていることにならないだろうか。殺しても殺人罪にならない以上、胎児は人間にカウントされないのである。

「人間」という言葉が意味すべき「正しい」^{アイデア} 観念、世界の側にある「人間」のアイデアというものがもしあるのなら、受精からスタートし出産でゴールを迎える胎児がいつから「人間」になるかは、そのアイデアに照らしてハッキリと確定できるはずで、このような混乱など生じる余地はない。だが、ごく単純な事実の問題として、そんなことはないだろう。誰が「人間」の処グウを要求できて、誰はできないのか……をめぐる論争は、いままなお続いているし、今後とも形を変えて問いつけられるに違いないのだ。そして、この争いにそのつど一応の決着をつけるものは、「何カ月から胎児の神経系が形成されるのか」といった「科学的」判断ではなく、ぼくたちがどのような形で共に生きたいかというさまざまな思いのぶつ

かりあう力関係なのである。

中絶をめぐる論争は、母体の権利、生まれてくる未来の子供の権利、人口爆発を抑止すべきだという社会的要請……といった論点が複雑に絡む問題だから、ここでこれ以上深入りすることはできないけれど、最後にもう一点だけ触れておきたい。「人間は理性的動物である」という命題をこれまで何度か取り上げてきたが、それは従来かなり広く受け入れられてきた人間の定義であると言ってもいいだろう。それは一見冷静でごく穏当な事実確認のような顔つきをしている。だがこの定義を裏返せばどうなるだろうか。当然それは、「理性的でなければ、(たとえ人間の恰好をしていても)人間ではないのだ」……という結論、それゆえ「理性的でなければ、たとえ人間から生まれた存在であっても殺してよい(ないしは殺すべきである)」……という実践的⁵命令を導く前提命題として機能するだろう。「理性的」とはどういうことかという別の問題はあるが、たとえば「知能指数○○以上の知的能力をもつこと」といったアメリカふう⁵に割り切った議論をするなら、「重度精神遅滞児」や「脳死患者」は人間ではなくなることになる。断っておくが、こういう類いの議論はなにもぼくが思考実験としてこしらえたモウ想的意見などではなく、アメリカを中心とするバイオエシックス(生命倫理学)の議論の中でかなり有力な見解として今日堂々と主張されているものなのだ。こうした風潮の中では、たとえば一定の基準「以下」と認定された「先天性障害児」は、「医療資源配分上の」社会的要請によって「処分」されるべきだ……というのとどまらず、生命体としては生かしつつ、たとえば医療用の「ホルモン分泌工場」として有効利用すべきだ……とまで主張されるにいたっているのである。

もちろん、こういう主張が忌まわしいものだと思ってしまうのは断定的なことではないだろう。直観的には①に見えても、よく考えれば理屈が通っているということはたくさんあるのだから(理屈は通っているのに、どうしても我慢できないようなこともあると言ってもいいが)。だがこういう主張の可否はさておき、「人間は理性的動物だ」といった一見穏健な命題が、具体的には凄まじい実践上の争いと地続きになっているということだけは、押さえておくべきだろうと思うのだ。

またまた長くなってしまった。ここらが切り上げ時かもしれないね。とにかく、「人間」というものが世界の側にまずあって、その実在を素直に写しとって「人間」の観念ができあがり、それに「二・ン・ゲ・ン」という音声記号(言葉)をつけた……というような^dソ朴な見方では事態はとらえがたいということだけは分かってもらえただろうと思う。「人間」というのは、いろんな思惑がぶつかりあい血を流しあう中で、ぼくたちが歴史的に作り上げてきた——そしていまも・こ

れからも作り上げていかねばならない——そういう危^{クリ}な^テつ^イか^{カル}しい概念なのである。そして、ぼくがさしあたり唯名論の立場に立とうと考えるのは、実念論やイデア論の考え方でいくと、このような言葉と概念をめぐる緊張関係が見えにくくなること、唯名論においてはじめて、このカテゴリーの綻びや争いというダイナミズムが見えてくるということ、そういう事情からなのである。

こうして残念なことに、言葉の意味の頼りなさは、カテゴリーの検討をとおしてますますハッキリと口^ク呈^{テイ}されてしまったようだ。「安心」を求めるぼくたちの漂流はどこまで続くのだろう。だが、そのことがはたして「残念なこと」なのかどうかはまだよく分かりはしない。焦らずに、言葉とぼくたち人間との関係をさらに考えていくことにしよう。

(古茂田宏『醒める夢 冷めない夢——哲学への誘惑』による。ただし一部変更した。)

問一 波線 a 〳 e のカタカナを漢字に直した場合と同じ漢字を含むものを、次の各群の ① 〳 ⑤ のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

解答番号は

1

5

a
モウ^〳想^〳

1

- ① 猪突^〳モウ^〳進^〳するタイプだ。
② ひどく消^〳モウ^〳した。
③ 漁^〳モウ^〳を設置した。
④ 権威にモウ^〳従^〳する。
⑤ 軽拳^〳モウ^〳動^〳を慎^〳め。

b
厳^〳力^〳ク

2

- ① ヤドカリは甲^〳力^〳ク^〳類に属している。
② 彼は力^〳ク^〳式のある家の出身だ。
③ タマネギの収^〳力^〳ク^〳の時期だ。
④ 弁当は力^〳ク^〳自持^〳参^〳することある。
⑤ 気候変動で漁^〳力^〳ク^〳量が減る。

c
処グウ

3

- ① グウ像崇拜の宗教だ。
- ② 著者の知グウを得た。
- ③ 一グウを照らす。
- ④ 神社のグウ司にあいさつした。
- ⑤ グウ然の出会いに驚く。

d
ソ朴

4

- ① 大統領候補がソ撃された。
- ② 政府がソ税を課す。
- ③ 簡ソな住まいを建てた。
- ④ 新しい政党をソ織する。
- ⑤ ソ国を離れて移住した。

e
口呈

5

- ① 口命をつなぐ。
- ② 語口がよい。
- ③ 香口で焚く。
- ④ 賄口を受け取る。
- ⑤ 口頭に迷う。

問二 傍線1「類概念」とあるが、特定の種に対する類の具体例として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は

6

① 「白人」に対する「黒人」

② 「直観」に対する「本質」

③ 「男性」に対する「ヒロシ」

④ 「人間」に対する「動物」

⑤ 「アイデア」に対する「個体」

問三 空欄アに入る語句として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は

7

① 演繹的

② 反証的

③ 還元的

④ 帰納的

⑤ 建設的

問四 傍線2「違うと思う。」とあるが、なぜ著者はそのように考えるのか。最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は 8。

- ① 何かについての「本質」と言われるものは、人々の思惑とも関係する認定行為の結果であり、したがって認定行為しだいではその「本質」の内容も変わってしまうから。
- ② 何かについての「概念」と言われるものは、人々の思惑とも関係する先験的直観の所産であり、したがって先験的直観しだいではその「概念」の内容も変わってしまうから。
- ③ 何かについての「イデア」と言われるものは、人々の思惑に関わりなく確固不動のものとしてあり、したがって「絶対的真理」も、この「イデア」に基づいて初めて成り立つことになるから。
- ④ 何かについての「直観」と言われるものは、人々の思惑に関わりなく、個体の認定行為に先立つものであり、したがってその直観に係ることでは「普遍概念」は成り立つことになるから。
- ⑤ 何かについての「真理」と言われるものは、人々の思惑に関わりなく絶対的なものであり、したがって唯名論も実念論も互いに誤謬を説明しあえる以上、ともに「真理」とはなりえないから。

問五 空欄Ⅰ・Ⅱ・Ⅲに入る語の組み合わせとして最も適切なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は

9。

- | | | | |
|---|-------|-------|-------|
| ① | Ⅰ ただし | Ⅱ しかし | Ⅲ やはり |
| ② | Ⅰ ただし | Ⅱ しかも | Ⅲ むしろ |
| ③ | Ⅰ または | Ⅱ しかし | Ⅲ やはり |
| ④ | Ⅰ または | Ⅱ あとは | Ⅲ だが |
| ⑤ | Ⅰ だから | Ⅱ あとは | Ⅲ むしろ |
| ⑥ | Ⅰ だから | Ⅱ しかも | Ⅲ だが |

問六 傍線3「紆余曲折する」は、ここではどのような意味か。最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 10。

- ① 複雑な経過をたどっている
- ② のびのびとゆとりのある
- ③ 空間的に広がっている
- ④ 最短の道筋を常に避けてきた
- ⑤ 数々の障害を抱えている

問七 傍線4「何が人間で・何が人間でないかをめぐるカテゴリーの線引き争い」とあるが、これについての著者の主張として最も適切なものを、

次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 11。

- ① この線引き争いは、実は、「人間」として誰と共に生きたいかの思いである。この思いは、科学的根拠に基づくようになってきており、その時々々の力関係に左右されるものの、非科学的偏見から脱する傾向に変わりはない。
- ② この線引き争いは、実は、「人間」に唯一あるべき本質規定を直観できることに基づいている。この規定は、その社会的背景は異なるものの、さまざまな思惑の中で決まってきたという意味では、無視されてはならない。
- ③ この線引き争いは、実は、「人間」として取り扱われるべきは何かをめぐる論争である。この論争は、肌の色や胎児の人間性などその焦点を変えつつ、その時々々の力関係で暫定的決着を呈するだけで、終わることはない。
- ④ この線引き争いは、実は、「人間」とは何かをめぐる科学的探究である。この探究は、人種や胎児の神経系などその対象を変えつつ、その時々々に一応の結論を踏まえながら進展したのであり、今後も継続されるべきだ。
- ⑤ この線引き争いは、実は、「人間」という「正しい」観念が実在するからこそ、可能となる。この種の観念は、複雑な諸論点を組み込みつつ、その時々々の思いのぶつかりあいの中で見出されたのだから、将来も見出されるはずだ。

問八 傍線5「実践的命令を導く前提命題として機能するだろう」とあるが、ここでのその説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は

12。

① 「人間」から生まれた存在であっても、知的能力に欠けている場合がありうると認められれば、「人間は理性的動物である」という命題そのものを否定する十分な論拠が示されてしまうということ。

② 「人間」から生まれた存在であっても、生命体ではないと主張されれば、「人間は理性的動物である」という命題が、その存在を「処分」してもよいという決断を肯定する根拠になってしまうということ。

③ 「人間」から生まれた存在であっても、殺すべきだと判断されれば、一方の殺されなかった存在に依拠して、「人間は理性的動物である」という命題を適用する範囲も決まってくるということ。

④ 「人間」から生まれた存在であっても、理性的ではないと認定されれば、「人間は理性的動物である」という命題が、その存在を殺してもよいという判断を正当化する理屈になってしまうということ。

⑤ 「人間」から生まれた存在であっても、社会的要請に応じてその存在を「処分」してしまえば、この行為に導かれる形で、「人間は理性的動物である」という命題も自ずと定まることになるということ。

問九 空欄①に入る語句として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は

13。

① ドラマチック

② オーバー

③ スマート

④ ダイナミック

⑤ グロテスク

問十

傍線6「地続きになっている」とあるが、この言葉の言い換えとして適切でないものは、次のイ〜リのうちいくつあるか。その数を表わす丸数字を、マークシートの①〜④のうちから一つ選べ。一つもない場合は⑤をマークせよ。解答番号は

14。

イ 矛盾していない

ロ へだてられていない

ハ 連続している

ニ つながっている

ホ 分かれている

ヘ 協同していない

ト 断続している

チ 仕切られている

リ 絶縁している

問十一

傍線7「さしあたり唯名論の立場に立とうと考える」とあるが、このように著者が考えるのはなぜか。最も適切なものを、次の①〜⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

15。

① 言葉の意味が個体の経験に先立つと主張する実念論よりも、頭の中に瞬間的に思い浮かぶ知的産物として言葉の意味を理解する唯名論の立場に立てば、言葉において意味の綻びや争いが反映されつづけるということを認めうるから。

② 実在する本質の模写として言葉の意味を捉える実念論よりも、認定行為によって言葉の意味が作られると論じる唯名論の立場に立てば、思惑のぶつかりあいの中で言葉の意味が歴史的に作り変えられるということを認めうるから。

③ 直観に先立つて経験の中に言葉の意味を見出す実念論よりも、言葉の意味に先立つて多様な個体が存在すると主張する唯名論の立場に立てば、流血のたたかいを伴った歴史の中で言葉の意味が変化するということを認めうるから。

④ 世界の中で直観された本質に言葉の意味を帰着させる実念論よりも、実在する本質の素直な写しとりとして言葉の意味を理解する唯名論の立場に立てば、歴史の中で動揺しつづけている言葉の意味の危なっかしさを認めうるから。

⑤ 世界の中の存在の模写として言葉の意味を理解する実念論よりも、個々の認定行為に言葉の意味が由来すると主張する唯名論の立場に立てば、科学的調査と科学的判断によって言葉の意味が変化しうるということを認めうるから。

問十二 次のア～オのそれぞれについて、本文の内容に合致するものには①を、合致しないものには②をマークせよ。

解答番号は

16

く

20。

16 ア 唯名論も実念論も、タマゴが先かニワトリが先かという問題と同様に、循環構造をそれぞれなしている。

17 イ 何が「本質的」で何が「非本質的」であるかを認定することは科学の歴史の中で必ず収束する。

18 ウ 科学の発達とは関係なく、日本は、一定の法的基準は備えつつも、中絶についてきわめて寛容な国だ。

19 エ 人間は、たとえ人間の恰好をしているものでも殺してしまえる動物であり、それゆえ「理性的動物」ではない。

20 オ 言葉と人間の間を関係を考えるうえで「安心」を求めることは、まずもって否定されるべき願望である。

次の文章を読み、後の設問に答えよ。

「西洋哲学以外に哲学はない」という見方は、日本では近代に始まり今日でもまだ根強く残っているようです。しかし、そこにはある種の奇妙さが付きまといま¹す。

一九世紀以来、ヨーロッパや北アメリカの哲学者たちや一般人がこうした極端な考えを自明のものとして抱いていたのは確かでしょうが、その後欧米でもそういった偏向への批判がなされています。西洋中心主義への批判や、ポスト

A ・反植民地主義の議論です。

二〇一六年五月十一日にアメリカの仏教研究者ジェイ・ガーフィールド（一九五五～）と中国哲学研究者プライアン・ヴァンリノーデーン（一九六二～）が『ニューヨークタイムズ』に「哲学は多様化しないのならば、その実相を表す名を付けよ」と題する論考を寄稿しました。アメリカ合衆国にある哲学科が西洋哲学しか教えないのなら、「ヨーロッパ・アメリカ哲学学科」と名前を変えるべきだという主張です。この挑発的な問題提起に対して、アメリカでは、驚くべきことに、「西洋哲学以外に哲学などない」という時代遅れの反発が多数向けられました。

西洋文化の内部にいてその外や他者を知らずに育った学者が「西洋以外に文明はない」と断定する時、無知とそれに発する傲慢さは呆れを通り越して滑稽にさえ見えます。批判精神と自己知を誇っているはずの西洋哲学が、それらの徳をこれほどまでに欠いているのは嘆かわしい限りだからです。

他方で、もし「西洋哲学以外に哲学はない」と日本人が語ったとしたらどうでしょう。そもそも西洋以外の文化と思想のなかで育ち、その意味や奥深さに通じているはずの人々が、西洋中心主義の無知と盲目をオウム返しにするのは、どういうことでしょう。自己卑下や韜晦^注でないとしたら、自分は「西洋」に属している、あるいは、その一員になったとでも思い込んでいるのでしょうか。西洋の学者がそもそも井戸の中しか知らないがゆえにそう言うのはまだ理解できるとして、井戸の外にいて大海を知り得る者がその発言を引き受けることは、とても奇妙です。

①

私は、世界哲学の試みとは、まずこの西洋哲学中心主義、あるいは西洋哲学独占主義をきちんと批判し、その外の豊かで多様な可能性に目を向け、多元的な真理探求の現実化に賭けることだと考えています。西洋哲学自体もその外部も理解せずに「哲学」という名の幻想に閉じこもる排他的な態度も、反対に「哲学」を拒絶してあえてそこから距離をとって「思想」を名乗る態度も、ともに不十分です。世界哲学の視野は、まさにそういった態度に風穴をあけるものです。

（注）韜晦…自分の才能や地位、身分、行為などをつつみかくすこと。人の目をくらますこと。

日本では一九世紀半ばから西洋哲学が導入されてようやく文明化し、それを咀嚼²して独自の哲学が生まれたのが一九一〇年に刊行された西田幾多郎（一八七〇～一九四五）『善の研究』だ、そう語られています。それゆえ、西田哲学やその後の哲学だけが「日本哲学」と呼ばれる傾向にあります。

中江兆民（一八四七～一九〇一）が晩年に『一年有半』で記した「わが日本古^{いにしへ}より今に至るまで哲学なし」という言葉が、決まり文句のように掲げられて、日本にはあたかも本当に何の哲学もなかったかのような思い込みが広まっているのです。兆民がこう言った時、本当の哲学は自分が示すという気概と希望をこめていたはずですが。しかし、彼はその後すぐに逝去したため、この言葉をバネに哲学を進めることはできませんでした。その言葉を言い訳にして、自分たちには「哲学がない」などと開き直る後世の人々の態度を見たら、兆民は憤慨することでしょう。

しかし、このような限定的な視野は、西洋文化帝国主義・植民地主義のイデオロギーを内面化して強化するものでしかありません。そのような狭い視野が哲学そのものを貧困にし、機能不全にしていることを、私たちは自覚すべきです。それは、これまで哲学の中心として大きな影響力を振るってきた西洋哲学の見直しと再生にもつながるはずです。

では、「哲学」と呼ぶべき普遍的な知的営為は、どのように可能なのでしょうか。私たち人間が世界の各地で、歴史や文化や宗教のさまざまな伝統を背負って行っている哲学のローカルな営みは、それぞれが異なった形式や主題や方法や特徴を持っています。それらがすべて哲学であるといったん認めたうえで、そこから共に哲学を進める場を作っていく意識的な試みが「世界哲学」です。つまり、世界という視野に広げること、特定の強い伝統に閉じこもりがちな思索や活動を世界へと解き放ち、そこで対話を通じて新たな哲学を立ち上げようとする試みが、世界哲学なのです。大切なのは、西欧で培われた「西洋哲学」も一つのローカルな哲学 **B**、という認識です。

他方で、世界哲学のような試みが結局は全世界の西洋化であり、一方的な文化侵略になりかねないという危険性を、つねに意識しなければなりません。それを避ける手段は一つ、つまり多様な立場の間で真に **C** な対話を実現し、日本や非西洋から哲学のあり方を積極的に提示して、その意義を共有することでしょう。つまり、日本の伝統思考や芸術や世界観には西洋哲学とは異なる可能性があり、それも「哲学」として論じるべきことを正しく示す必要があります。

② さらに、そういった開かれた哲学を認めない限り、西洋哲学も狭いローカルな範囲に留まってしまい、おそらく現代の社会や世界に十分に対応できないことを意識すること、それが必要です。哲学を真に私たち全員の哲学にする試みが、世界哲学なのです。³

「世界哲学」という言葉は、これまでさまざまな哲学者によって提唱されてきました。その一人に、ドイツの哲学者でナチス政権に反対の態度をとりつづけたカール・ヤスパース（一八八三〜一九六九）がいます。ヤスパースは第二次世界大戦の直前に「世界哲学」の理念を抱き、戦後の著作でそれに言及しています。哲学といえば西洋哲学だけと考えられていた時代に、哲学を世界に開こうとした試みは立派でしたが、実際に十分に広い視野で具体的な考察が呈示されるまでには至りませんでした。

「世界哲学」の理念が時折唱えられ、重要性が認識されてきたにもかかわらず、具体化せず成功しなかった理由は何でしょうか。私は基本的な二つの限界があったと考えます。一つには、一人の、あるいは少数の研究者が世界の多様な哲学伝統や歴史に精通してそれを正確に伝えることは不可能だからです。実際、ブッダ（前五世紀頃）や孔子（前五五一頃〜前四七九頃）らを論じたヤスパースでさえ、西洋以外の伝統については必ずしも十分な知見を持っていなかったと指摘されています。個人の能力と D には限界があります。

もう一つは、どこか一つの視点から世界の多様な哲学伝統を万遍なく見渡すということ、とりわけ偏りなく十分に見ることの限界です。どちらも、言われてみればごく当たり前のことです。

例えば、アメリカ合衆国では「世界哲学」と呼ばれる教育科目があり、欧米だけでなく他の地域の哲学についても教えています。確かに視野を広げるといふ意義はありますが、例えば日本哲学では、英語に訳されたごく限られた著作（の一部）や哲学者がカリキュラムに含まれるという状況です。これでは、表面的で偏った見方から脱することは容易ではないでしょう。いわば「アメリカから見た世界」の哲学だからです。

世界哲学が本当にその名に値するものであれば、むしろアメリカやヨーロッパでの哲学のあり方に違和感を差し向け、それを相対化したり批判したりする役割を果たすものでなければなりません。今のところ、欧米での世界哲学の試みがその域に達していないのは、その内部にいる欧米の研究者たちには本当の外部を見ることが難しいからではないでしょうか。アジアやアフリカから研究者が参加している場合でも、C な対話の場を実現するのは並大抵のことではありません。真の世界哲学への道は遠いようです。

日本発のプロジェクトが目指しているのは、そういった限界を超える「世界哲学」の構築です。そうは言っても、それも結局は「日本から見た世界」に過ぎないのではないか、そんな意見も聞こえてきます。しかし、少なくとも二点で、私たちのプロジェクトは従来の試みとは異なっています。

一つは、日本を拠点に進めることの利点です。従来哲学の本拠地とされてきたヨーロッパや北アメリカ、とりわけイギリスやフランスやドイツやアメリカ合衆国といった中心地では、どうしても自国の哲学が中心となり他の哲学伝統を周縁として扱う構図になりがちです。それは、英語やフランス語といった言語の制約でもあります。他方、東アジアで別の哲学伝統を誇ってきた中国でも、どうしても中華思想から他を周縁として捉えがちになります。その点、両文化の周縁にある日本は最適な位置にあります。東アジアにおいて中国から儒教や道教を、そしてインド起源の仏教を取り入れて古来の土着文化と融合してきた一方で、近代には東アジアで西洋哲学を摂取する先陣を切ってきました。多様な他の伝統に開かれた日本は、世界哲学を遂行するには望ましい場だと言えるでしょう。

二つ目は、日本では西洋から東アジアまで幅広く質の高い専門研究がなされている点です。個々の専門研究者の守備範囲は必ずしも広くはなくても、それらが集まって一つの議論の場が築ければ、他の地域では難しい総合的な世界哲学が可能になるのではないかと期待されるのです。

しかし、日本において日本人研究者が日本語だけで議論していても、本当の「世界哲学」にはならないでしょう。それはやはり「日本から見た世界」に過ぎないからです。それを超えるためには、世界のそれぞれの地域や文化、あるいは異なる領域での海外の研究者たちと共同で議論を続けていく必要があります。日本は、そのためにもおそらく格好の場となります。③ そのような開かれた対話の場として、日本が「世界哲学」を理念として打ち出し、その議論を牽引する役割がある、私はそう信じています。

世界哲学を成立させるのに、いきなり「世界」に向かうことはできません。世界を構成している多くの地域や伝統があり、ヨーロッパ哲学や中国哲学、日本哲学など、まずは個別の哲学伝統を吟味し追究していく必要があるのです。それらを照らし合わせ、そこにより普遍的な哲学の姿を見ることが、世界哲学です。したがって、世界哲学という方法は「比較哲学」と「哲学史」という二つの枠組みをとります。

では、世界哲学はどの範囲で遂行されるのでしょうか。この問いには、二つの観点を区別する必要があります。哲学を遂行する主体と、哲学で考察される対象です。

この区別は一見当たり前に思われるかもしれませんが、けっして自明ではありません。例として「現代フランス哲学」を取り上げてみましょう。多くの人は、サルトル（一九〇五～一九八〇）やメルロ・ポンティ（一九〇八～一九六二）やレヴィナス（一九〇六～一九九五）、さらにドゥルーズ（一九二五～一九九五）やフーコー（一九二六～一九八四）やデリダ（一

九三〇〜二〇〇四）ら、現代フランスの哲学者たちと彼らの言論活動を指すと考えるでしょう。しかし、その限定は正当でしょうか。

例えばドゥルーズは、ベルクソン（一八五九〜一九四二）らフランス哲学者の他に、フランシス・ベーコン（一五六一〜一六二六）やスピノザ（一六三二〜一六七七）やヒューム（一七一〜一七七六）やカント（一七二四〜一八〇四）やニーチェ（一八四四〜一九〇〇）といった哲学者たちを論じています。したがって、その議論はイギリス哲学やドイツ哲学の範囲に入りますが、それでもドゥルーズが論じている限りは「現代フランス哲学」とも呼ばれます。議論の主体（フランス）と対象（イギリスやオランダやドイツ）がズレている場合、どちらからでも取り上げられるのです。^④

また、ドゥルーズの著作や議論は日本でも盛んに論じられています。それがたんなる紹介や翻訳に留まらないとすると、ドゥルーズを論じる著作も「現代フランス哲学」と呼ばれて然るべきです。実際、図書館や書店でその名称の棚を覗くと、ドゥルーズ自身の著作の翻訳に加えて、それを論じる本格的な研究書も一緒に並んでいます。フランス哲学の著作を読み批判的に思考することで、日本語で展開している哲学も、広い意味で「現代フランス哲学」と呼ばれるのです。

そうだとすると、「現代フランス哲学」は、必ずしもフランスだけで、あるいはフランス人によってだけ行われるのではなく、それに参画する主体は、世界中のどこにでもいることになります。特定の地域や文化の出身でなければならないとか、特定の言語や伝統を背負わなければならない、ということはないはずで、これをフランスから他の地域へと拡張すると、世界哲学の主体がすべての人に開かれていることが分かります。

では、世界哲学が考察する対象はどうでしょう。かつては西洋哲学のみが「哲学」の名に値し、それ以外は対象から排除されてきました。ヘーゲル（一七七〇〜一八三二）がインド哲学や中国哲学を彼の「哲学史」の本体に入れなかったのも、それが対象として不十分だという理由からです。しかし、そんな見方が偏狭であることは、すでに明らかでしょう。⁶ 世界哲学が扱う対象は、従来の西洋哲学を越えなければなりません。

もし現代フランス哲学が純粋にローカルな哲学として存在するとしたら、フランス人哲学者たちがフランスでフランス語によってフランス語の哲学書を対象にして議論する哲学に限られます。しかし、世界哲学ではむしろ主体と対象がズレていて、そこに積極的な意義が見出されると考えてみましょう。すると、日本人が現代フランスの哲学を論じること、あるいは、現代のフランス人が日本の哲学を論じることが、より重要な役割を果たすことになります。^⑤

ローカルに哲学する生粋のフランス哲学者は、その限りで他の哲学伝統に目を向けて、そこで他者に出会うことは少な

くなります。対照的に、主体と対象がズレていてその差が大きいほど、そして、より多くのズレがあるほど、開かれた哲学が發展します。

私自身を例にさせてもらうと、現代日本で生活する者が、古代ギリシアの哲学を対象にして、世界各地に行つて複数言語で議論しています。それは、古代ギリシア哲学であり現代日本哲学であり、英語圏などの哲学の一部です。そして、ソクラテスやプラトンの問いに向き合い考えることで、まさに今、哲学をしています。こうして私たちは、すでに世界哲学を行つているのです。

このように、世界哲学の主体は世界中のあらゆる人であるべきで、同時に、世界哲学が対象とするのは世界のあらゆる思想や言説であるべきでしょう。無知ゆえに、これまでは「哲学などない」と思い込んでいた文化や伝統のなかに、自分とは異なる哲学の生き生きした営みを見たり感じたりすること、それが世界哲学の醍醐味なのです。

各主体が自分の伝統や哲学の立場を越えて、異なる哲学の伝統に出会いそれを対話の相手とすることで、自己の特殊性を自覚することになります。そして、その異質な哲学が一つではなく、複数の多様な哲学を対象とすることで、さらに視野が広がり、より豊かな思索を重ねることが出来ます。そうして多くの哲学を包み込むことで、世界の全てを哲学の対象にすること、その哲学の営みに世界のさまざまな人が主体として参加すること、そうして「世界哲学」は真に豊かなもの、人類の知の可能性や潜在性を最大限に生かす営みとなるのです。世界哲学こそ、私たちが今生きる場と、自身のあり方を気づかせてくれる契機なのです。

（納富信留『世界哲学のすすめ』による。ただし一部変更した。）

問一 傍線1「そこにはある種の奇妙さが付きまといまゝ」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は

21。

① 「西洋哲学以外に哲学はない」という見方が、西洋と異なる伝統や思想に対する無知に由来するものであるがゆえに、非西洋の文化的・思想的背景を持ち、西洋哲学独占主義に疑念を抱き得る日本人がこの見方を無批判に受け入れているのは奇妙であるということ。

② 「西洋哲学以外に哲学はない」という見方を、西洋哲学の意味や奥深さを十分に吟味しないまま、日本人がヨーロッパや北アメリカの哲学者たちを盲信するかのように自明のものとして支持しているのは奇妙であるということ。

③ 「西洋哲学以外に哲学はない」という見方が、西洋中心主義であるとして批判の対象となるのが現代哲学の潮流であるがゆえに、こうした批判に対して時代遅れともいえる反発が依然として多数みられるのは奇妙であるということ。

④ 「西洋哲学以外に哲学はない」という見方を、西洋哲学の伝統である批判精神や自己知と相容れないものであるという自覚がないまま、ヨーロッパや北アメリカの哲学者たちが抱いているのは奇妙であるということ。

⑤ 「西洋哲学以外に哲学はない」という見方が、西洋以外の哲学を雑駁で非体系的な「思想」と名付けるような排他的な態度に表れているがゆえに、近世より「日本哲学」という名が浸透している日本でこの見方がまかり通っているのは奇妙であるということ。

問二 空欄Aに入る「植民地主義」を表す語として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は

22。

① アナーキズム

② インプレッションイズム

③ コロニアリズム

④ ナシヨナリズム

⑤ モダニズム

問三 本文には次の一文が抜けている。これを入れるのに最も適切な箇所を、本文中の空欄①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は

23。

というのは、必ずしも相互に接触や友好関係がない地域の人々でも、日本という第三の場に集い、そこでの議論を介して新たな結びつきを作ることが可能だからです。

問四 傍線 2 「それを咀嚼して」とあるが、波線部の読みが「咀嚼」の「嚼」と同じものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は 24。

① 惜_レ別

② 静_レ寂

③ 錯_レ乱

④ 痼_レ癩

⑤ 顰_レ蹙

問五 傍線 2 「それを咀嚼して」とあるが、「咀嚼する」という語の意味として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は 25。

① 完全に無視する

② よく考えて十分に理解する

③ 鵜呑みにしてそのまま取り入れる

④ 新しい形を作るための基盤とする

⑤ 持論に都合のよいように解釈する

問六 空欄 B に入る語句として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 26。

① に値しない

② に過ぎない

③ ではない

④ ではない

⑤ ではない

問七 空欄C（二箇所）に入る語句として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 27。

- ① 緊密
- ② 対等
- ③ 学術的
- ④ 国際的
- ⑤ 友好的

問八 傍線3「哲学を真に私たち全員の哲学にする試み」とあるが、これにつながる行動に該当しないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は 28。

- ① 一方的な文化侵略の危険性を孕む西洋哲学をローカルな範囲に留めておくこと。
- ② 西洋・非西洋を問わず、それぞれの立場から哲学のあるべき姿を提案して共有すること。
- ③ 思索や活動の受容あるいは発信を、各々の伝統の枠内だけではなく世界を相手に行うこと。
- ④ 目指すべき世界哲学の発展が全世界の思想の西洋化という結果に終わらないよう留意すること。
- ⑤ 世界各地の歴史や文化、宗教の伝統を背景とするさまざまな思索の一つ一つが哲学に値するものと認識すること。

問九 空欄Dに入る語として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 29。

- ① 気概
- ② 視野
- ③ 態度
- ④ 立場
- ⑤ 理念

問十 傍線4「どこか一つの視点から世界の多様な哲学伝統を万遍なく見渡すということ、とりわけ偏りなく十分に見ることの限界」とあるが、

それはどういふことか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 30。

① さまざまな伝統や文化を背景とする視点を伴う「世界哲学」の取り組みでないと、「世界哲学」が教育科目として存在していても何の意義もないということ。

② さまざまな伝統や文化を背景とする視点を伴う「世界哲学」の取り組みでないと、訳書に頼らざるを得ない局面で良書に出会うのは容易ではないということ。

③ さまざまな伝統や文化を背景とする視点を伴う「世界哲学」の取り組みでないと、存在自体が世界的に認識されていない哲学まで網羅するのは不可能であるということ。

④ さまざまな伝統や文化を背景とする視点を伴う「世界哲学」の取り組みでないと、多様な哲学伝統に対する理解が浅く狭い、不十分なものになってしまうということ。

⑤ さまざまな伝統や文化を背景とする視点を伴う「世界哲学」の取り組みでないと、世界の多様な哲学伝統を見渡そうとしても、哲学の名に値するかどうか判断し難いものの扱いに苦慮してしまうということ。

問十一 傍線5「日本を拠点に進めることの利点」とあるが、それはどのようなことか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうち

から一つ選べ。 解答番号は 31。

① 日本哲学を中心に据えることを通じて、西洋哲学や中華思想を周縁として捉える見方が可能になること。

② 「日本から見た世界」という視座を強く打ち出すことで、従来の西洋哲学中心主義を打破できること。

③ さまざまな哲学を、それらの周縁という位置で寛容に取り入れてきた歴史的経緯があり、偏りのない議論が見込めること。

④ 古来より哲学のない日本だからこそ、特定の哲学伝統を中心に据えるような偏った見方を伴わない議論が期待されること。

⑤ 世界の哲学者や研究者たちが議論を進める際に必要となる中立の言語として、非西洋言語である日本語の存在があること。

問十二 傍線 6 「世界哲学が扱う対象は、従来の西洋哲学を越えなければなりません。」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適

切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 32。

- ① 世界哲学の枠組みでは、「西洋哲学」の定義が見直されるべきであるということ。
- ② 世界哲学の枠組みでは、西洋哲学の理論はこれまでよりも格段に洗練されたものであるべきということ。
- ③ 世界哲学の枠組みでは、「西洋哲学」という概念はもはや存在しないものと考えるべきであるということ。
- ④ 世界哲学の枠組みでは、全世界の西洋化につながる「西洋哲学」の名称はもはや必要ではないということ。
- ⑤ 世界哲学の枠組みでは、これまでの西洋哲学が対象としてこなかった言説も扱われるべきであるということ。

問十三 著者の考えに合致するものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。 解答番号は

33

34

- ① 世界哲学の構築に向けて、個別の哲学を吟味することは必須ではない。
- ② ヤスパースの思想は、「ドイツ哲学」の枠を超えて論じられることが可能である。
- ③ 西洋哲学の領域では、これまで世界哲学の理念の重要性が提示されることは全くなかった。
- ④ 「哲学」と呼ばれることを拒み「思想」を名乗るものは、世界哲学の対象から外れてしまう。
- ⑤ 多様な哲学伝統を照らし合わせ、そこから普遍的な哲学の姿を導き出す試みが世界哲学の手法である。
- ⑥ 世界哲学構築のための議論を英語やフランス語で行うことは、結局は世界哲学の西洋哲学化につながってしまう。

(こ の ペ ー ジ は 白 紙 で す)